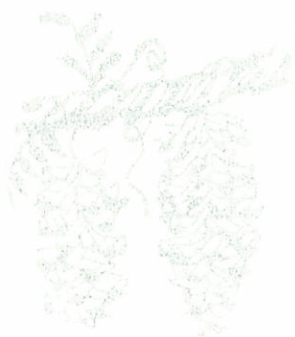


特集 II 中 近 東

経済、文化レベルと快適性

小林 博之
当協会専務理事



1、原稿の命題は「中近東地方における環境の快適性」についてであるが、私には、この命題を受けた時、次の2、3のことが頭を巡った。

第1は、中近東を含め東南アジア、アフリカ等、いわゆる後進諸国に、我々のいう「環境課題の快適性」なるものがあるのだろうか？我々が用いる快適性の具体的指標などは適合しない。これ等の地域には快適性云々の以前の問題がある。

第2は、私がこの課題に答えるには資格が欠けるということである。4年前に初めて、中近東ではエジプトのカイロ市に2日間の視察あるのみであり、無理をして同じ回教圏の文化を持つモロッコを入れるにしても、カサブランカ、ラバト、ダンジールの3都市をそれぞれ1日位の視察だけであるからである。

第3に快適性の概念には、多分に哲学的内容を含蓄されており、それぞれの国に、それぞれの文化、文明があり、内容も異なるところから、一概にこうだという論評は危険極まりない。

ただ、東洋の言葉に「衣食足って礼節を知る」とあるが、住を加えて、「衣食住」をある程度満した文化レベルの中でこそ、快適がどうかという問題にせまられると思う。我々日本人の終戦後の混乱期からこの方の歴史的経験の中にも、その縮図が見られる。

第4に、東京オリンピックの時の光景を思い出す。2人でやって来た、エベレストの近くにあるブータンかどこかの国の人であったか？幼稚園の子供が書いたようなお日さまのような国旗を担いで行進していた。「東京のような都市はどうか？」の問に対し、「東京はすばらしい。だが住みたくない。」と答えていた

ことを思い出す。ブータンと東京では、文化や利便性では相当な開きがあるのだが、「住む」となれば「NO」である。含蓄のある一言である。2、カイロ市は、中近東における代表的な国際都市である。ところで現在、農村人口が職を求めてどんどん流入し、あち等こち等にスラムができ、小川はドブの満ちた下水道となり、ごみはやたらと散乱し、人は肩が触れんばかりにうごめき、警笛と騒音が乾いた空気の中にじんあいと共に舞い上っている。

政府や市は、この問題の解決のために米国、日本、西独の援助資金で、第2のカイロ市並の都市建設をやっているが、多くは近代文明社会の欧米流都市建設をしているようであった。適性な人口配分をねらっての都市造りであるが、砂漠の中に建てる都市だけに、防砂林、地下水の確保等々莫大な資金を要する。

現地のインテリ曰く、立派なものだが、人が住めば、またまた第2のカイロになってしまうと。

また、全て、西欧様式ということにも次の事が思い出される。日本に来たある米国人が、日本に来て私達の国の延長線上にある町に来たような感じだ。日本は日本の古いものをもっと生かすべきだという言葉である。

同じ中近東でも、石油輸出で得た資本を国造り、都市造りに莫大な投資をしているクエートなどは、また違うかも知れない。

3、同じ文化、回教圏の西端、モロッコも、決して豊かな国ではないが、西欧に近いだけにかなり程度は高い。現在、旧市街地をどんどん崩して、西欧型都市の構築を急いでいる風潮であった。

しかし、ここで思ったのは、旧市街メディナのことである。雑多な雑然とした迷路のよ

うな町並の中に、それこそ庶民の活気が溢れている。これを壊してまで合理の粋のような都市に造り変えてしまうのはいかがなものかと。

メディナは、それ自体の機能を持ち、下町のもつ特殊な働きを果たしている。いわば東京上野にあるアメヤ横町のそれである。全部潰して近代化するには誠に惜しい存在である。

環境の快適性の指数からすると、ほとんど合格しないが、庶民の利用と活気と商業経済の面から、これはこれで一つの価値として残しておくべきであると思う。

4、終りに快適性を語るには何か不十分であるが、中近東にしろ、アフリカにしろ西欧にしろ、この町に永住したいという決心を持つには、かなり長期の現地での生活が必要であろう。住めば都という言葉もあるが、一方、現状に満足するに足りず、他に良き範を求めてよりよきものを創ろうとする意欲は否定できない。

中近東においても、富が大衆に行き渡り、教育文化が平均的に高まれば、このような住環境にありたいと、環境の快適性が彼等なりに論ぜられるであろう。

また一面、ある有名な画家が言う快適な町になったが、絵でいう詩情がなくなったということも一つの視点である。